第２９回　戦争体験を語り継ぐ集い

戦時体験記録集＜第２４集＞

知ってください　触れてください

子どもたちの未来に　愛と平和の現実を創造するために

思い出すのも辛い体験を　自ら語る語り部たち

胸に秘めた強い思いは

「二度と戦争を起こしてはいけない」

「生きている命を大切にして欲しい」

戦争になると　人が人ではなくなります　命が命ではなくなります

はじめに

◇「戦争体験を語り継ぐ集い」とは

　戦争を知らない、のちの世の人たちのために、戦時下での暮らしや、軍隊生活の実際、危険と隣り合わせの現実があることを、伝えています。また、体験者ご自身に直接語っていただくことの重みを大切にしています。命の大切さ、平和のありがたさへ思いを馳せる機会になることを願いながら、毎年開催しています。

　この集いは、名古屋市緑生涯学習センター主催の事業で、進行は「戦争体験を語り継ぐ会」が担当しています。行政と市民が協働した取り組みを続けています。

　この冊子を手に取ってくださる皆様からも、平和への祈りが広がりますように。

◇戦時体験記録集について

　体験として語られる言葉を記録として残す大切さがあります。語り継ぎタイムで話される言葉は、生き生きとして心深くに響いてきます。けれども、その場にいる人にしか伝わらず、耳から聞いたことは、いずれ消えていく運命にあります。こうして文字にすることにより、集いに参加できない人たちへ、後からの人たちが読み返すことができるように、読み継いでいただけるように、願いを込めて作成しています。

◇冊子「飛翔」について

　「飛翔」は年４回発行され、夏梅誠一さまより橋詰四郎さんへ送られてきています。

　橋詰四郎さんは「戦争体験を語り継ぐ会」を初回からリーダーとして引っ張ってこられた方です。

　夏梅誠一さんと橋詰四郎さんは、同じ部隊の４年兵と初年兵という関係で、終戦間際の満州を生き抜かれました。（P６参照）そして、戦後もこれまで長年に亘って親交が続いています。

　「飛翔」には戦中戦後の様子が多く書かれています。その中から、お許しを得て、私たちと共通する思いが綴られている文を、戦時体験記録集として編集しています。

　今年も、皆さまの「戦争のない平和な世界を！」との熱い思いとご協力により、戦時体験記録集が完成いたしました。深く感謝申し上げます。

戦争体験を語り継ぐ会　一同

戦時体験記録集＜第２４集＞

◆目　次◆

＊語り部さん記録＊

戦時中の女学生の体験から（五十嵐桂葉）　－－－－－－－ P1

『学童集団疎開』の一員として（八神邦子）　－－－－－－ P3

満州のこと（紺田尚良）　－－－－－－－－－－－－－ P4

広島の人たちの祈りにより今在るこの命（橋詰四郎）－－－ P6

＊飛翔より＊

〝棄民〟のあしあと(56)（夏梅誠一）　－－－－－－－－ P12

〝棄民〟のあしあと(58)（夏梅誠一）　－－－－－－－－ P14

私の第二次大戦（中村昭乃）　－－－－－－－－－－－－ P16

中国残留孤児（西圏秀子）－－－－－－－－－－－－－ P18

勧進橋（板本吉之）－－－－－－－－－－－－－－－－ P20

忘れえぬ人々(3)―噴飯（山間朽木）－－－－－－－－－ P22

私の中国物語(少年篇) 6―妻と娘の為に―（星博人）－－－ P24

愛すること（田中昭夫）　－－－－－－－－－－－－－ P26

戦時中の女学生の体験から

五 十 嵐　桂 葉

今日は、昭和 18 年から２０年の終戦後しばらくまでの間に体験したことをお話しします。

私は、名古屋市内から西春のおじさんの家に、母と二人で縁故疎開していました。

昭和７年生まれですが、国民学校６年から小牧高女１年までの体験です。昭和６年生まれより年上の人は勤労動員で軍需工場へ行っていました。そして、空襲などで多くの人が亡くなりました。

我が家はトラック３台に家財などの荷物を載せて西春に行きましたが、戻るときは荷車３分の１に減っていました。近隣の農家に行き、着物などを食べ物と交換して暮らしていました。その頃の配給と合わせて+ｂ６も、食料はとても足りませんでした。

足りない食料を補うために、今では食用にはならないようなものも食べました。ハコベは食べられます。野草やサツマイモのつるを茹でて食べました。また、畑で捕まえたイナゴも炒って食べました。調味料はこくわずかの塩だけで、それもとても貴重な大切なものでした。

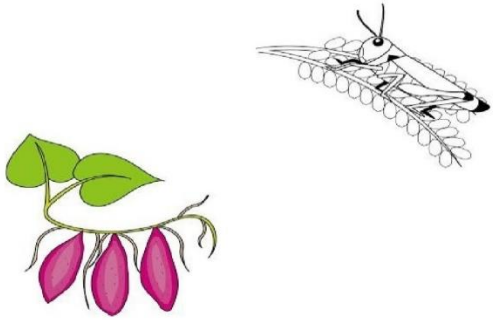
名古屋空襲（大規模空襲：昭和２０年３月１２・１９日・５月１４日など）を西春から見ました。爆弾を落とす前には照明弾が落とされ、周りがよく見えるように明るくします。それから焼夷弾が落とされるのです。西春からは赤々と燃える名古屋が見ていました。

暮らしは突然命の瀬戸際に立たされるのが日常でした。米軍艦載機による機銃掃射に遭い、道端の溝に逃げ込み命拾いしたこともあります。その時は、道の反対側の竹やぶを目がけて、２回も襲ってきました。搭乗員の顔が見えていました。いつ来るか分からない機銃掃射はとても怖いものでした。

そして終戦後は、荒れた田畑に実る穀物が無く、本当に食べるものに困りました。最も餓えがひどかった頃です。

米ぬかに虫のわいた小麦を少し混ぜて蒸した「米ぬか団子」を、一日にひとつしか食べられない生活が、一週間は続いたように思います。とてもひもじい暮らしでしたが、母と二人、なんとか過ごしてきました。

今日は、その頃に食べていた「米ぬか団子」を皆さんに味わっていただきたいと思い、試食品を持参しました。どうぞ食べてみてください。



『学童集団疎開』の一員として

八神　邦子

次の世を　背負うべき身ぞ　逞しく
正しく伸びよ　さとに移りて

この御歌は、誰方が、いつ、誰のために、詠まれたのでしょうか。

東京・名古屋・大阪・神戸等の国民学校（現在の小学校）に在学していた３年生から６年生の学童（児童）に対し、『疎開』が始まったのは、１９４４年（昭和１９年）だった。

その年の８月１４日、蝉シグレの暑い日、重ね着をした上に大荷物を抱えた私（３年生）は、学童集団疎開の一員として、疎開先の伊勢神宮外宮近くの旅館に行く為、中区御園国民学校の校庭に、汗だくで整列していた。

当時の生活状態は、全ての金属類が弾丸作成のために『供出』され、食事は一汁一菜・梅干しと沢庵のみの「日之丸弁当」だった。

『贅沢ハ敵ダ』の標語のもと『欲シガリマセン勝ツマデハ』の精神が子供達にまで、徹底されていた。

学童百名に対し、付き添い教師２名、寮母賄婦も２名ずつの約束は、人手不足から守られず、自分の事は全て自分で処理することが当然となった。荷物の整理整頓は勿論、洗濯・縫い物・掃除・配膳・後片付けなど。

こうして１０歳にも満たない私達は、恋しい母の膝から離され無期限（戦争が終わるまで）の疎開生活を送ることになった。

ここにその生活内容を【さびしい・ひもじい・かゆい】の言葉で表現してご理解いただくと共に、「平和の大切さ」と「お互いの命の大切さ」を再認識したいものと考えます。

憲法の前文にも『全世界の国民が平和のうちに生存する権利を有する』と、ありますように。

満洲のこと

紺田　尚良

私は昭和１４年生まれで、今年７８才になります。満州のハルピンで生まれました。父は軍人で、母は結婚と同時に広島からハルピンに嫁ぎ、私を産んで、２ヶ月後に亡くなりました。

その後、広島から二番目の母が来て、７才まで父と母と暮らしていました。終戦の年、８月９日に、ソ連兵がせめてくるということで、母と私は日本に帰ることになりました。

ソ連兵がおそいかかってくる、弾丸が飛びかう中、新京まではギュウギュウづめの列車でした。新京から上海までは、川の中を胸までつかり歩いたり、月の明りで夜も歩きました。コーリャン（牛のえさ）一杯が食事でした。

二枚目に　地図がありますが　ハルピンから上海までは、約北海道から九州までぐらいあります。

そんな中　ソ連兵に殺されたり、歩けなくて亡くなったり、中国人に預けられたり、多くの人が亡くなりました。

私も骨と皮になりながら、何ヶ月もかかり上海にたどり着き、昭和２１年広島のおじさんの家にたどり着きました。

昭和 28 年に、父が引き揚げ船で帰ってくることが新聞にのりました。中学１年生になっていた私は、父が死んでいると思っていましたので、複雑な気持ちで迎えに行きました。

父は中国で捕虜になっていたそうです。

以上が、子供の頃の一番苦しかった体験です。

二度とこのような思いをする人が出ないように、平和な日本が続くことを、願ってやみません。

戦前における日本植民地

広島の人たちの祈りにより今在るこの命

橋詰　四郎

出征して、満州からシベリア抑留を経て、帰港するまでの間、広島の人たちの祈りによって、わが命は導かれ、守られていた。
それは戦中戦後のことを思い返す今、深い感謝の念と共に、私の中に湧いてくる、確かな思いだった。

広島⇒博多⇒プサン（釜山）⇒アイグン（瑷琿）へ

昭和19年10月、19歳の私は広島から出征した。その日は真夜中に突然起こされ、私語禁止の令、真っ暗な中を出征していった。軍国主義を叩き込まれた若者たちを乗せて、軍用列車は鎧戸を下ろしてひた走った。

道中慣れると、電柱の陰に人がいることがわかった。夜中であるにも拘わらず、皆合掌しながら、私たちを見送ってくれていた。その姿を見た時「私はこの人たちのためなら死んでもいい」と思った。それまでは、N氏の講演会に足しげく通い、その言葉を信じて貫くつもりだった。「若者よ、天皇陛下からいただいた頑強な身体を大切にしなさい。戦地に赴いたら、たくさんの手柄を立て、生きて帰り、親にどれだけの手柄を立てたかを、報告しなさい。それが本当の天皇陛下に対する真の忠義である」しかし、広島出征の夜、私の決心は変わった。

初年兵にとって軍隊は厳しい日々だった。先輩の衣類の洗濯も仕事の一つ。だが、私の先輩、夏梅誠一さんは慣習には従わず洗濯をさせず、しかも聞かれたら「洗っていると言え」と。この洗濯は別の意味もあった。忙しさにかまけてついつい不潔になりがちな環境を、洗濯を義務付けることで清潔を保つ狙いがあった。虱（しらみ）が湧くのは日常茶飯事だった。

夏梅さんは珍しく出世しない人で、4年兵だったため、皆から一目置かれていた。ある日洗い場で洗濯をしていると通りがかりの声が聞こえた。「橋詰には手を出すな！！橋詰には夏梅がついているからな」その言葉通り、私はほとんど殴られることはなかった。

「橋詰！これを持っていけ！」　「どこへ？」　「読めばわかる！」
そこには『30分帰ってくるな』と書かれていた。初年兵は外では走らなければいけないが、鉄鋲のついた軍の靴は重く、それを履いて30分走るより殴られた方がましと思った。集団で現れるオオカミの恐怖もあった。

なんとか30分過ごして帰ると、みんなの顔は腫れ上がっていた。全員殴られたのである。私への命令は必ず大声で言い渡された。それは夏梅さんに聞こえることにより「橋詰を殴っていない」と分かるためだった。

先輩の教え【殴られない秘訣】
① 声が大きいこと
② 集合時、5本の指に入ること
③ 全身に刺青があること
幸いにも、声が大きかった。

8月6日、私は本部からの命令を中隊長に届ける役目を担った。本部で受け取った書簡は封がされておらず内緒で読んだ。そこには、広島に新型爆弾が落とされたこと、それに関わる注意事項が書かれていた。

【兵を屋外へ出す時の注意事項】
- **白の長じゅばん（シャツ）を着せること**
- **皮膚をむき出しにさせるな**
- **脱走に注意せよ**

新型爆弾＝化学兵器：毒ガスの進歩したものだと思って疑わなかった。

また、戦時中の日本では、満州を「平和でこの世のパラダイス」と言い移民を推奨していた。しかし、ハルピンを経てチチハルに入りペイアンへ入る行程で軍用列車の前後に守りのためにトーチカ車が連結された。おかしいと思った。また、命令書を受け取る時に軍馬で行くのだが、背を低くして突っ走れと言われた。いつどこで命を狙われるのか分からない危険があるからだ。つまり満州は「平和なこの世のパラダイス」ではなかった。

＊聞くと見るのとでは大違いの現実がそこにあった＊

命令書はその後兵たちに伝わる機会がないまま、8月9日にソ連との戦いが始まった。私の隊は関東軍第六国境守備隊、ソ連との最前線を担った。戦いが始まると、くじで特攻隊（爆弾を抱えて敵部隊に突っ込み玉砕する）を10名決める。その場で2階級特進になり、死んだら軍神、名誉の戦死で称えられる。私は狙撃兵のため、くじから免れた。

第六国境守備隊は北から南下してくる敵（ソ連兵）を3時間だけ食い止めろ、玉砕しても任務遂行だった。3時間のうちに南満州の日本軍は準備を整えると言われていた。軍には必ずある「軍旗」というものが無かった。軍旗は天皇の象徴であり、敵に取られるのはもってのほか、玉砕覚悟の第六国境守備隊には、軍旗は必要なかった。捨て駒だった。人間爆弾、手りゅう弾と共に玉砕する人もいた。このような人たちから死んでいった。

8月15日、終戦の日も知らずにいた。私たちの部隊は、9日からずっと21

日までソ連兵を食い止めていた。
8月21日、白旗を持つソ連兵を見て、日本の勝利を確信、大喜びした。だが事実は、敗戦だった。
8月22日が武装解除と決まったが、私は逃げると決めた。捕虜は日本の家族を非国民扱いにするとされていたからだ。結局、ひとりで逃げることになったが、班長は、たくさんの塩とマッチを別々の油紙に包んで渡してくれた。「絶対に水に濡らすなよ。濡らした時には命は終わるぞ」と。
逃げだしてから、ある時ハッと気づいた。ひとりぼっち、周りは全て敵、「しまった！」と思った。野宿しながら、畑で馬鈴薯やトウモロコシで食いつないでいた。ある時100人くらいの日本兵を見つけ、あれだけいたら殺されないだろうと思い、夜を待って潜り込んだ。翌日、本部の中隊長から「いつまで戦ったか？」と聞かれ、21日に事実を知った経緯を話した。第六国境守備隊がへなちょこだったから負けたと思っている兵隊もいたが、その部隊は感謝していた。満州鉄道で働き、守備隊の守りのために安心して仕事ができたという。しかもロシアにとっては、ソ連兵を殺していない日本兵だった。私はその仲間に入れたのだ。

帰国するためと乗せられた私たちの列車は、途中休憩して止まる度に、現地の人たちに列車の向かう方向を確かめた。だが「ウラジオ」ではなく「モスクワ、モスクワ」と言う。またある時は、大海原が見えたので「日本海だ！！」と歓び叫んだが「バイカル、バイカル」と教えられた。ウラジオストックとは正反対のヨーロッパに近い内陸部へ向かっていた。シベリアへ行くのだった。それでも帰国を信じる人はいた。そうこうするうちに、ボツボツ死ぬ人が出てきた。互いに「痩せたな」と声を掛け合う。ある人が親指と人差し指で輪っかを作り「足首をこれで測って、くるっと回るようだったらもうすぐ死ぬんだ」と言った。みんなは手首を触っていたが、急いで足首を出した。その話をした当人が回るのだった。事実、その人は2～3日後に帰らぬ人となった。
シベリアに抑留された人たちが従事した仕事には2種類あった。「シベリア開発」「ロシアの戦後復興」だった。シベリア開発に従事することは過酷で、氷点下の中、栄養失調も重なり、凍死する者が続出。私は幸運にも戦後復興に携わり、零下45℃の真冬でも暖房付きの屋内での仕事だった。
機関車修理工場に配属され、帰国までにいろいろな体験をした。まず0上等兵に「日本へ帰れると思うなよ。5～6年は帰れない。だから、身体だけは気をつけろよ」と教えられた。
修理工場はほとんど女性ばかりの職場で、旋盤担当になった。見せてもらった旋盤に刻印されていたのは日本語だった。逃げて以降、初めて日本語に出会えた日だった。懐かしさがこみ上げてきた。驚くことに旋盤は80％近くが日本製だった。
ロシア語は一生懸命に覚えた。最初に「泥棒＝セルマーニョ」を覚えた。自分のノルマを横取りされないためだった。もともと日本で旋盤工だった私はその経験が役立ち、腕の良い職人になった。上手下手は削りくずで見分けがついた。下手な人のくずは紫色、上手な人のくずは綺麗な白色、一目瞭然である。

しばらくするとこちらをちらちら見る者たちがいることに気づいた。「橋詰は広島から来た」という噂が流れていた。ソ連の人たちは広島の現状を知っていた。「アトム、アトム」という言葉と共に「広島に一週間居たら、髪の毛が抜けて、血を吐いて、死ぬ」と聞かされた。「広島には誰も住めない。作ったものは食べられない」とも聞いた。それはいくらにも信じがたく、舞鶴へ帰港して初めてその話が真実だったと知った。

私は早く死にたかった。虱だらけの不衛生な環境では、発疹チフスが流行り、罹患した者の最後は悲惨だった。死んだらトラックに積み込まれ、どこかへ運ばれて行って終わりだった。私は「こんな死に方はしたくない、きれいに死にたい」と願っていた。
ある時ロシアの若い女性軍医がやってきて、薬がないので患者を助けるためにO型の献血を呼びかけた。献血したら3日間休ませる、という。私は「これで死ねる」と喜んで応じた。「生きる＝地獄・死ぬ＝極楽」と私は思っていた。女医の部屋に行くと机に突っ伏して泣いていた。「今日も日本兵が死んでいった」と。私は日本兵が死ぬことを泣いてくれる人がいることを、初めて知った。本当に悲しんでいた。
だが、献血に来たことを告げると、大喜びし、表情が一変した。ヨーロッパの献血は400ccが普通だった。持ってきた献血用の注射の大きさを見て驚いたが「死ぬ確率が倍になる！」と喜んだ。献血が終わり部屋に戻り横になっていたら、お礼として「米・砂糖・バター・肉：各300g」が手渡された。この時ばかりは同室の友人たちも手を出さず「少しずつ食べよ」とアドバイスしてくれた。4日目に死ぬ気だった私は「一気に食べる」と言い、調理してもらったが、出された鍋にはひまし油がギラギラと浮いていて、途端に食欲は吹っ飛び、同室の友人たちの胃袋に入ることになった。
ロシアでは泥棒をしても庇い合う。それだけ頻繁に起こるのだ。ロッカーに入れてあった3本の刃物を盗まれた時も、盗んだことを怒り続けると、

周りの人たちが庇うのだった。いちいち怒っていては友人がひとりもいなくなるのだ。

工場の休憩時間では、ロシア人たちは靴を盗まれないように膝を抱えて寝る。軍用トラックから子どもたちが袋を素早く持っていく。しかも通行人も軍人も笑ってみているだけ、黙認だった。軍の物資は配給前の物資で、スターリンの物だからもらってもよい、配給後は個人の物なので盗みになる、という考えだった。自分たちの仕事が進まないのはスターリンが材料をよこさないからだ、スターリンが悪いと平気で言う。夜の駅に止まっている貨車から荷物を盗み出す時には見張り役をやらされたりした。これが普通の生活だった。

シベリアに入る前に脅された。「スターリンという独裁者がいて、すごく怖いぞ」と。でも、庶民はスターリンの悪口を平気で言い、軍の物資ももらっていく、咎められるどころか、それが互いの助け合いだった。

＊聞くと見るのとでは大違いの現実がそこにあった＊

私はロシアの人たちに信用されていた。3勤で夜勤は私ひとりが働いた。悪いことをしようと思えばいくらでもできる状況だったが、それでもひとり夜勤、信用されていた証拠だろう。もちろん悪さはしなかったが。

また、日本人の男はロシア人から「娘と結婚してほしい」とよく願われた。ノモンハンの捕虜たちはロシア人と結婚して、模範的な家庭を築いていたからだ。よく働き、妻の言うこともよく聞く、素晴らしい家庭だったので、望まれるのだ。私は全て断った。日本人女性の方が良かった。

ある日、労働者がストライキを起こし、蒙古系の女性監督になり、初めて給料をもらえるようになった。しかし、日本人は給料をもらっても使うところが無かった。健康状態などの理由で仕事ができない人の分を仕事ができる健康な人が稼ぐという仕組みもあった。かなりの額を稼いでいた私は、手元に多くは残さず、皆と楽しめることに使っていた。例えば、ウォッカを持ってきてくれと金を渡し、持ってきたウォッカは皆で楽しく飲む。そんな生活をしていたので、ロシアの人たちにも良くしてもらっていた。一生懸命に貯めていた友人は帰国時にすべて取り上げられてしまった。落胆は大きかった。私は「ばかだな」と笑いながら、共に帰国した。

【うぐいすに　耳貸す時は　いつ来たる】

共産主義思想の教育のため「日本新聞」というものがあり、ある日こんな詩が載っていた。私はこれを読み、初めて「日本に帰りたい！」と思った。帰って鶯の声を聞きたいと思った。

捕虜生活も長くなり、日本へ手紙が出せる時が来た。捕虜通信。模範的な人たち、許可が下りたが、私はその人たちに返事が来る頃にやっと許可をもらった。「今、誰と、どこにいて、何をしている」は書けない。欲しいものは書いてもよかった。そして、文頭にはスターリン大元帥への感謝の言葉も書かなくてはいけなかった。

【今日は雨　明日は晴れ】　私は日本一短い手紙を書いた

「これだけでいいのか？元気だと書かなくてもいいのか？」と聞かれたが、これで母は分かってくれると信じていた。「今は大変だけど、のちには帰国して、笑顔になれる」という意味だ。後日母に聞いたら通じていて「帰ってくるんだなぁ」と安心したと。嬉しかった。母の愛である。

やがて私は帰国を果たした。今こうして在る命は柱の陰から手を合わせ見送ってくれたあの広島の人の祈りのお陰である。　　**（感謝）**

＊参考＊　橋詰四郎さんのお話が聞ける機会

7月30日（日）10時30分より
　於：カトリック鳴海教会（鳴海小学校北）
8月15日（火）14時より
　於：日本キリスト教団金城教会にて（東区代官町）

「今年は橋詰さんにぜひお話を」という要望に応えてくださいました。体調を考慮し、記録は聞き取り形式にて作成しました。

多くの大切な命が奪われたあの戦争、過酷な捕虜生活を潜り抜け、橋詰さんは帰国を果たされました。今日もこうして命の尊さ、戦争のない平和な世界を願い、活動を続けるためにこそ、生かされてある命、その使命を果たしておられることが伝わるお話でした。私たちも戦争のない世界のために、それぞれの使命を果たして行かなければと決意を新たにするものでした。聞かせて下さった橋詰さんに感謝し、益々のご健康と御活躍を祈念するものです。

聞き取り日　2017年7月4日
　場　所　橋詰四郎さんご自宅にて
聞き取り者　荒川淳子・斎藤めぐみ（文責：荒川淳子）

冊子「飛翔」より

〝棄民〟のあしあと（５６）

夏梅　誠一

私は絵図室、他の四人は製本室で仕事の段取りや要領などの説明を受けたあと、庶務課へまわされた。

案内された部屋では、係の者が区分けされた棚から私たちの身丈に合った軍医やシャツや下着などを各人に渡しながら「これを着るんだ」と言った。敗戦以来身に着けていたオンボロの日本軍衣を脱ぎ、解放軍の衣服に着替えていると、誰かが「これでいよいよ日本の軍隊ともおさらばか・・・」「まだ帰国まで何があるかわからんぞォ」などとささやいているのが聞こえ、これでまた帰国の道が遠のくのかもと不安を感じた。

私たちは着替えと食器袋を提げて教材課へ戻り、私は絵図室へ入った。衣替えした私を見たＭがオドケ顔で「ヤァ、夏梅同志、回来了（シャメイトンズホイライラ）」と拳手の礼をしたので、こちらもテレ隠しに頭を下げた。

終業時間になったのでみんなと一緒に大食堂へ行った。大きな建物には六人用ぐらいの机が行儀よく並び、その一角に私たちは席をとった。椅子はなく立ち食いで、夕食は高粱飯に白菜と豚肉の炒めものと辛い漬けものだったが、それら夕食のお菜もこの建物も、北安軍政学校の食堂とほとんど変わらないものと思った。

私たちの宿舎は旧日本人官舎が当てられ、絵図組の同僚と同室だった。床上には畳をはめこんだ木造の寝台が並び、私の寝台には何枚かの毛布と枕が置かれていた。

翌朝、みんなと一緒に掃除を済ませ、粟粥と中華味噌と生葱の朝食を摂り、職場へ向かった。自席に着いたみんなは、写真と描いた絵を見比べたり、仕事の準備を始めた。

始業時間になり、私はＭと一緒にＵさんの席で支持を受けた。Ｍは仕事を貰って自席へ戻り、私はＵさんがアタリをつけた首から下の『背面筋肉図』を見せられ「この前面をＩ君が描いているから、それを参考にこの背面図を仕上げるように」と指示された。

私は（これが初仕事か）と緊張気味に図面を受け取った。

私は「ちょっと見せてください」と声をかけ、Ｉの傍に立った。Ｉが面相筆を巧みに使い、肩から胸にせまる大胸筋の流れを太く細く線描きで質感を表現するあたりに熟練の筆勢を感じた。それが彼の言う「慣れ」なのかと思った。

自席へ戻った私は、いささかの緊張を持って初の面相筆を下した。それからは自分が描きなれてきた肘を軸とした手法で線描きをすすめていった。

十時から十分の休憩があった。製本室の誰かが「歌唱指導だよ」と呼びにきたので私もついていった。彼は『東方紅（トンファンホン）』だったかを一節ずつ区切って指導した。

それは日本人工会（労働組合）の教材課小組による文化活動であり、その日本人工会とは中国医大とで組織される学習や文化活動を行う組合であるとＩが教えてくれた。

午後の休憩までに線描きを済ませ、鉛筆の下書きを消し彩色をはじめるころ、私の席へきたＵさんは、二、三箇所に筆を入れ、何点か指示された。それを受けて私は朱に近い赤色で筋肉を描き上げた。Ｕさんの指導もあってか、初仕事をなんとかこなすことができ一息ついた。

次から仕事も肩先から指先までの筋肉図をあたえられたことは、さしずめ線描きに習熟するようにとの指導だと受け取りそれに集中した。教材課初日の仕事を終え、その日の床についた私は、明日の仕事をあれこれ考えているうちに眠ってしまった。

ついこの間まで炭鉱の休養室で抱いていた〝体力が回復しても帰国のその日までどれだけ持ちこたえられるのか〟という漠然とした不安が和らいだようだった。

〝棄民〟のあしあと（５８）

夏梅　誠一

１９４８年（昭和２３）旧正月の三が日は、はじめての祭日休暇となった。

いつもの食卓には分厚く切った豚肉の蒸し焼きや白菜、ニラ、もやしと肉や卵の炒め物、鯉のから揚げに野菜のあんかけなどが並び、それらにかぶりついた私たちは、「新年好（シネンハオ）」を連発していた。

そして、私たちが働く中国医大が瀋陽（旧奉天）の元満州医大を接収し、近いうちに移動する、すでに接収要員は現地に赴いている。という話に皆喜んでいた。それは私たち日本人にとっても帰国への距離が縮まり、戦後、生死の程も伝えられなかった祖国への通信にも期待が持てると思った。

とはいえ、軍隊時代と俘虜（ふりょ）労役を合わせて６年。もし、その年月をとられていなかったら、どのような将来があったのかなど、還らぬ過去を振り返りもしていた。

教材課の私たちにも出発の日が来た。キビシイ思い出しか残らないこの地だったが、去るとなれば感慨が残るところとなった。

私たちの専用列車が瀋陽へ到着し、雑踏する駅前を歩き出すとすっかりおのぼりさんになっていた。私たちが歩く街並みには、ツイ最近闘われた戦闘の痕跡など見られずこの街の広さを感じた。

陽が翳りだしたころ、煉瓦と鉄柵を組み合わせた塀の向こうに何棟もの高い建物が並んでいる辺りに着き、皆は「あれが医大らしいな」と話し合っていた。立派な正門脇の受付を通した私たちは、待っていた担当者に大食堂へ案内された。夕食後、私たちは分散している独身寮へ案内された。

教材課の私たちは、医大のすぐ近くにある２階建ての「育才楼」に割り当てられ、私はＩと同室になった。八畳ほどの部屋には畳敷きの木製ベッドが二脚、それぞれに寝具一式がおかれていた。

私たちは翌日から、開館準備前の図書館業務を手伝うことになった。

校門を入ってすぐ右側には大講堂が聳え立ち、その隣に切妻屋根の図書館が並んでいた。何段もの鉄板敷の書棚や通路には山積みの

書籍が散乱しており、その整理や分類、リストアップなど、大変な仕事だと思った。

開校準備は急ピッチで進められていた。私たちは、食事の往復などに教室や病棟などを覗いてみると、学生や助手たちが煤けた白壁や窓枠などを丁寧に洗い出し、みちがえるように明るくなっていて、かれらのこの学校に対する期待と熱意が伝わってきた。

大講堂で「この大学の理念」らしい講義を受けている国民党服や背広の人たちが喋っているのを聞いて、興山から一緒に来た中国人たちも「なにを言っているのかわからない」と言っていた。

教材課制作室が決まり、私たちはその清掃と什器、備品などの搬入と、その配置などの段取りに入った。今度の制作室は思いのほか広かったが、Ｏ課長は「開校すれば教科内容も学生数もぐんと増えるので、ここの要因も大幅に増員する予定で・・・」と言っていた。

旬日を経ずして、１２～３人の新規採用者が私たちに紹介された。彼らは今春、近くの魯迅芸術学院洋画部卒業予定者ばかりだったが、年齢は２２～３ぐらいから３０過ぎと幅があり、服装や態度からも生活環境はまちまちのように見えた。私たちの制作を見て歩いていた彼らは、この仕事に関心を寄せているようだった。

春を迎え、彼らが私たちと働くようになって間なし、室長のＵさんは彼らに、別室でメーデー行進に掲げる肖像画の制作を担当させた。メーデー当日は彼らが描いた著名な人物マルクスやエンゲルス、毛沢東や周恩来などの大きな肖像画を先頭に、皆が大行進に参加した。

行進の中で、日本語のプラカードを持った隊列を見かけたが、彼らも私たちと同様、工業部や衛生部で働く大勢の中国人たちと共に南下してきた日本人だろうと思った。

私の第二次大戦

中村　昭乃

『飛翔』百号記念パーティで、河野先様からパンフレットを頂いた。「守るべきものは何か、第二次大戦末期の事、検証、防空法ついて」 河野様は『飛翔』によると、御父上を昭和二十年三月十日の東京大空襲で被災死された体験の持ち主、帰って拝見した。

私は今まで、人生は楽しいこと、美しいことだけ憶えていればよい。他は目をつぶってきた。八十四歳の今七十年前の戦争体験を振り返ってみるのも、大切だなと気付いた。

第二次大戦は昭和六年　満州事変勃発で始まる。昭和十六年十二月八日　太平洋戦争突人。昭和二十年三月六日より、Ｂ２９による本土爆撃、東京、名古屋、神戸、大阪と激しくなり、広島、長崎に原爆が投下された。昭和二十年八月一五日、終戦。

私はのどかな加賀平野の真ん中で、昭和四年十一月誕生した。三歳の時、戦いの鐘が鳴り、以後十五年間、泥沼の戦いの中で成長した。

小学校六年の時、太平洋戦争に突入し、戦いの何かも知らずに、駅へ日の丸の旗を持って出征兵士を見送りに行った。日本は勝つ、神風が吹き神様が味方すると聞かされ、信じて疑わなかった。

女学校三年になった。学業がストップし、学徒動員令が出た。昭和十九年、軍需工場の石川製作所へ出向させられた。物資不足で仕事は少なかった。

昭和二十年の夏は、よく晴れていた。青空の下をＢ二十九が銀の翼を輝かして飛ぶ姿を三度眺めた。

福井市が空爆に合い、次に富山市が爆撃された。夜中、騒がしくて飛び起き、表に出ると、東の空が真っ赤に燃えている。暗い暗い闇夜に、嫌な重い重い赤、地獄の赤い火、あの下に大勢の人が居る。呆然と空を見上げていた、いつまでも燃えていた。我家は金沢の西、富山から遠く離れているのに、隣家の火を見るようだった。次は金沢かと、皆がひそひそと話していた。

昭和二十年の春に、金沢第九師団属する一連隊が、我家の裏の県立農学校に疎開してきた。

学校前の我家は、慶長六年と歴史は古いが、小さな小さな寺、表玄関を通らず、裏庭から座敷に出入り出来る。隊の宿舎となり、上官、副官、お付三名、計五人の兵隊が、二部屋のトイレ付座敷を使う事になった。

当時、横浜の伯母が小学生と女学生の娘をつれて疎開中、我家も七名居る。父は受入れたくなかったが、非国民と云われるのを恐れて同意した。

来ると同時に苔むした中庭に、アサヒビールのケースが大量に運び込まれて、足の踏場も無くなった。

ゆすら梅の木も折れ、白つつじも、ぐしゃぐしゃになった。酒盛りの時は料理兵が来た。

敗戦になり、兵士五名は、夜宴会をして、翌日さっさと引上げて行った。帰宅前に台所に居た私に、吸口を借り、一升瓶のお酒を、三人の水筒に詰めて持帰った。

その後、別の兵士が二人来て、しばらく居た。家の台所事情は、この頃が一番大変だった、

配給制度が破綻して、欠配ばかり、店には物がない。母は　お米に麦、豆、芋、大根、菜を入れて炊いた。うどんをこねた。

ある日、今日は、おかわりなしと言われた。五歳の弟が、もっとほしいと、ダダをこねた。母は自分のものを半分与えた。

こんな様子が知れたのか、兵隊さんが、丼鉢一杯白い御飯を持って来てくれた。私は恥ずかしくて席を立った。兵隊さんは、自分達だけ白い御飯をたっぷり食べるのに忍びなかったのだろう。名前を稲垣さんと云ったが、朝鮮系の人だとの事だった。

我家が兵隊に占領された期間は半年程だった。頂いた物は御飯一杯だけだったが、戦火の中を逃げまどう事もなく、満腹ではなかったが、親の努力で飢える事もなく、生きることが出来た。

皆が同じ状態だったから、堪えられたのかもしれない。

国民を戦争へ、死へと追いやった軍国主義の日本は終わった。平和になった。二度と戦いに巻込まれないようにと願うのみだ。

中国残留孤児

西 園　秀 子

１９８０年ころに、テレビに映る情景を、我が姿のように思いながら見たことを思い出す。

肉親をさがして中国からやって来られた方たちの多くは、荒れた肌や髪をして、中国語しか話せない中で、手掛かりになりそうなことを必死に伝えようとされていた。肉親に逢えて涙する方もあったが、失意のうちに過ごされる方が多かった。戦後から３０数年が経っていて、遅すぎる中国残留孤児の訪日だった。

中国との国交がやっと回復したのが、１９７２年（昭和４７年）敗戦から２７年も経っていた。中国に残された残留婦人や残留孤児さがしが始まり、集団訪日調査が始まったのは１９８１年だった。なんでこんなにも長く置き去りにされたのだろう。国交がないといっても、敗戦時に多くの残留婦人や残留孤児がいたことはわかっていた。戦後すぐ「土着せよ」という方針だったというが、そのとおりに満洲に住む邦人は見捨てられた。死んだことにされて、戸籍から消された人も多かった。

孤児となった人たちは、優しい養父母さんに育てられた人もいるが、労働力として売り買いされたりして辛苦の道をたどられた方も多かったようだった。山崎豊子さんの小説「大地の子」は、残留孤児たちのたどった戦後の実態をかなり正確に踏まえて描かれているように思う。

様々な困難を乗り越えて、やっと故国日本に帰国された方のその後の生活も大変だった。帰国がかなって、家族と共に帰って来られたのは、１９９０年代が多かったと思う。もう４０歳から５０歳になってからの帰国後の生活は大変だった。言葉が通じない中での就労や生活の保障は不十分で、二度三度と日本国に見捨てられた思いを持たれたことと思う。

多くの方が国相手に「国家賠償請求訴訟」の裁判に踏み切られた。２００２年以降、全国１５の地域で提訴されたという。２００７年に「改正中国残留邦人支援法」が制定されることとなった。祖国日本での暮らしが少しは心休まる状況にはなったと思うが、家族も含めて地域で安心して暮らしていけるといえる程ではないように思う。

先日、山形県の裁判闘争の記録の本を読む機会があった。

『祖国は遠かった―中国残留日本人孤児の証言』

原告の証言には、想像を超える厳しい体験が語られていた。家族を失っただけでも厳しい中、食べ物もなく着る服もなくさまよった。優しい養父母さんに育てられた人もいるが、その人たちも「ちび鬼」「日本鬼子」といじめられたという。冬も裸足で働かされて「牛糞を見かけるとすぐ足を入れて温め、足が凍傷にならないようにした」とか、苦しい生活を強いられて生きのびた証言も多かった。

この方たちの生きざまをたどることは、戦争の歴史をたどることとなる。それは、日本の侵略史を学ぶことでもある。満洲国建設・日中戦争・太平洋戦争とつき進んだ日本の歴史の中で残留孤児は犠牲になった。なぜ満州開拓に多くの人が行ったのかを知ると、国策として開拓民に課せられた役割や、戦況の中で期待されていた課題があった。国家は、その野望のために国民をだまし、いくさの駒として使い、個人の命を使い捨てる。

当時の状況をふりかえってみると、敗戦前の５月には、満州東南部を守る作戦をたて、北部のソ連国境付近の関東軍を南下させながら、開拓民をそのままにし、新たに入植させたりしたのは、なぜか。そこには個人や国民の命を軽んじる軍人大国の感覚があったし、国の為に尽くし、命を捨てることをよしとさせられてきた戦時下の人権意識があったように思う。

戦後７０年となる今、真摯に学び、過ちを繰り返さないようにしなければならない。悲惨な体験者たちの平和への思いを受け止め、平和を守るための戦いを続けなければいけないと思う。

勧進橋

板本　吉之

橋の向こう岸に、一筋の道が北に伸びていた。その道が、ちょうど小京都と言われる田舎町の街並みに見られる古さを感じる道に見えた。だが、現実にはそんなことはあるはずがない。私の頭は錯乱した。時代が合わないからである。

私は、なんとかこの橋の名前を思い出そうとし『勧進橋』でなかったかと思い始めた。ネットで地図を見たが、橋の名前はなかった。

しかし、最近勧進橋のたもとは、頭上に東西の高速道路が走り、京都高速と呼ばれている。橋の北側には二本の東に向う道が走っている。西に伸びる道も、ちょっと変則的な道で、いずれも非常に近代的な交差になっているのを知っている。だから、古さを醸す北への道ということはあり得ない。同時に、納得のいかない北への道に恐怖を感じ、「この橋を渡つてはいけない」と自分に命じた。

後日、橋の北詰が現代的な交差に見えることを確かめて安堵し、橋を渡って北西詰に車を停め、歩いて橋の銘板を見に行った。付近は護岸工事が行われていて、銘板は工事用の合板に覆われていた。歩道を渡って東詰に行ってみると、合板の隙間にはっきりと『勧進橋』の字が読み取れた。楷書ではなく、行書にしてはあまりにも楷書に近いその文字が何となく古めかしく見えたが、「やっぱりこれは勧進橋だったのだ」という確信を抱くことができた。

私はしばらくその場に留まって先日の「古さを感じた道」のことを思った。「あれは幻想だったのだ」と思うに至ったが、「それではなぜそのような幻想が浮かんだのか」が気にかかり、「この橋は、何時頃に架けられたのだろう」という思いに取りつかれてその場を後にした。

その答えは案外早く見つかった。観光案内に、「平安時代に、僧侶が『勧進』によって集めた浄財で架けたので『勧進橋』と名付けた」とあったからである。私が京都に住み始めたのは今から六十二年前である。その時には、すでにこの橋が古い歴史と共にここに存在していたのである。私はその橋の名に畏敬の念を抱いた。

ネットには、去年十二月七日に行われた「朝鮮学校勧進橋児童公園奪還行動五周年」のデモ行進に関する記事がたくさんあった。

朝鮮学校が、京都の児童公園を五十年間不法に占拠して、校庭として使用していたと云うのである。この件について、「嫌がらせデモ」が行われた。そのデモが正気を逸脱しているにもかかわらず、京都市はそれを放置したとして、京都市に損害賠償の判決が下されたと云うことについては承知していた。だが、その根拠にこのような問題があったことは、今、「勧進橋」を調べようとしてはじめて知ったことである。

このあたりは、友禅染色の浜口染工場のあったところであるが、それがなくなって近代的な交差点になったので、人々の注目を集めている。それだけに、私が見た古い街並みの勧進橋北詰風景が気になる。

停めた車に戻ろうとした時、歩道と車道の間に立っているポールの根元に幾つかの花束があることに気がついた。北西角から西へ二本目のポールである。これは、この場所で交通事故に会い、この世を去った人に捧げられたものに違いない。私は、橋を北にわたり、左折してこの場所に走り込んだ車との接触死事故と捉えた。そう思うと同時にそのカーブを見た。北向きから左折するにはかなり鋭角なカーブになっている。なぜこのように極端な鋭角にする必要があったのか、私には大きな疑問がわいて来た。

もともとこの交差点は、東は北に、西は南に振られた変則交差になっている。それを、自然のカーブ以上に大きく鋭角化しているのは何故か、このことが気になって来た。このカーブが自然のカーブであったら、この場所でこの悲劇が起こる可能性が少なくなったのでないか、そのことが大きな課題として私の思いに迫って来た。

こゝに、長らくあった朝鮮学校がなくなっている。網に囲まれた空地がその名残でないかと思われた。

課題とさまざまな思いの充満する中で、勧進橋への関心が私を虜にし始めた。

忘れえぬ人々(3)―噴飯

山間　朽木

十六歳(昭和二十九年)の時の染工場での話、当時工場には普通の職人さん(技能塾練者)と「渡り職人」といわれる職人さんがいた。渡り職人とは高技能を持った有期間工で普通の職人さんの三割から四割の割高の賃金を貰っていた。渡り職人は単身赴任で工場の寮で寝泊りして月に一回か二回妻子の元に帰った。当時繊維と鉄鋼は輸出の花形で、日本経済を引っぱっていた。

職人さんの会話は飲む・打つ・買うが殆どだった。当時は赤線が健在で、都内至る所に赤線があり、工場所在地の近く、徒歩十数分の所に立石の赤線があった。渡り職人さんは金廻りが好く単身赴任なので、立石の赤線によく通っていた。休日、寮で車座になって渡り職人さんの奢り（おごり）で一升瓶を回し飲みする時は、相方のサービス振りなど披露して皆を笑わせたりした。

その中で職人さんとしては一風変わっていたのが赤羽から通勤していた渋谷仙太郎という人だった。

色白で面長で額はつるつるに輝いていた。額から後にかけてほとんど毛がなく、通勤の時も帽子をかぶっていた。頭の汗を拭う時、ハンカチを頭の上で滑らせるのでなく、上からそっと押さえて、毛に摩擦が無いようにしていた。その光景を見る度に大の男がするしぐさではないと思った。いつもポケットに単行本が入っており、昼休みになると、一人で読んでいた。少し近寄りがたい気難しい人だった。桶染めと言われる部門を担当して、試作品（サンプル）の作成や、不具合の修正などをしていた。

ある日、一つの丸テーブルで五、六人が昼食を食べている時、一人の職人さんから「君は将来どんな夢を持っているか」と何気なく聞かれた。「別にこれといった具体的なものは何も無いです」「具体的でなくとも、こういう風になりたいとかの夢はあるだろう」「そうですね、いつか将来は一日一万円ぐらいの税金を納めたいと思っています」僕は素直に答えた積りだったが、皆は大笑いした。中でも渋谷さんは口の中の米粒をテーブルに撒き散らした。

その日は僕の一万円が職場の話題を独占した。連絡で工場を歩くと一万円が来たなどと冷やかされた。

一ヶ月の手取り（給与から社会保険・食費・寮費を差し引かれる）千円余りの見習い小僧が、一日一万円の税金を納めたい等と、現実離れをした、その落差が笑いを誘ったのだろうと思う。

翌朝、渋谷さんが呼んでいると言うので、桶染めの現場に行った。渋谷さんは「昨日は笑ってすまなかった」と頭を下げた。「別に謝ってもらうことではないです。小さい時からの癖なんです。いつも雲をつかむような事を言う子だと母から言われていました」渋谷さんの話によると、昨日帰宅して奥さんに噴飯の話をしたら、奥さんは「人それぞれの考え方や思いがある、考え方が違うと言って非難したり、現実離れしていると言って笑ったりするのは人の道に外れている。手の届かないような夢であっても、年少者が夢に向って努力しているのであれば、応援してあげるのが人情でしょう、そしてとった行動が道に外れているとわかったら、詫びるのが道理でしょう」と諭したとの事だった。

噴飯（ふんぱん）事件後、渋谷さんは職人さんの中では一番親しくさせていただいた。他の人に対して指摘も褒めもしない渋谷さんだったが、僕には注文をつけたり指摘もしてくれた。残業につきものの菓子パンを食べない時は必ず僕にくれた。

今振り返ってみると、男尊女卑の風習が色濃く漂う時代、渋谷さんは多くの本を読み、人間平等の考えを持ち、その上、奥さんの提言を受け入れ実践できる懐の大きい人だった。

噴飯の光景を見たのはこれが最初であり、それ以降は目撃する機会に恵まれていない。遠い過去の雲をつかむ話が実現して、一日一万円以上の税金は何年間か継続して支払った。それも過去の話になってきている。

会社を興し、二十年間ほどトップして会社を引っ張ってきたが、勇み足で社員に不倫快な思いをさせたこともあった。そんな時、渋谷さんのように率直に謝罪できたらと思うこともあった。渋谷さんが、二十歳以上年下の少年に頭を下げた素直さを僕は持てなかった。噴飯した渋谷さんの光景よりも翌日の奥さんの話が鮮明に残っている。なぜだろう。

私の中国物語(少年篇) ６

―妻と娘の為に―

星　博人

伊光中学時代

中学の校舎は沈陽市（しんようし）南湖にあり、南湖は既に埋め立てられ市街地となっているが当時は郊外のゴミ捨て場となっていたドブ池で、当時は南湖の泥棒市は有名で、昨晩盗難に遭った品物を次の日に南湖の泥棒市に行けば買い戻せると言われていた程の環境の良くない場所にあった。中学一年生ークラスは約５０名で日本人小学校から入学してきた日本人が一クラスに４～５名いた。

国語、数学、歴史、地理等の他に外国語はロシア語が必須となっていた。建国初期であった事もあり、ソ連を兄貴分(老大哥)として尊敬していた時期である。

１９５０年秋から１９５３年冬日本に引き揚げる迄の３年間を私は伊光中学で過す事になるが、その間１９５０年６月には朝鮮戦争が勃発し、北朝鮮と国境を接していた遼寧省（りょうねいしょう）の省都沈陽市は中国国内の後方基地として騒然となっていた。同時期には土地改革、三反五反運動が発生、文革当時と同様学生もこれらの運動に巻き込まれ、寧ろ（むしろ）積極的に参加動員された時期でもあった。又外人だからと言ってサボる事は許されなかった。

土地改革運動は地主(豪農、中農と言われる私有地を有する農民も含まれる)の土地、財産を没収し貧農、下層中農に再配分する運動で、大多数の農民が貧困層であった事から、当時の農民の支持を得た。

この地主批判大会に学生も動員され農民の先頭に立って地主を批判した。文化大革命時代の紅衛兵のようなもので、中国の文革関連の書物で略（ほぼ）想像がつくと思うが、後ろ手を縛られ三角帽を被せられた地主が壇上に跪かされ、農民と思しき人達が壇上で彼を指差し何か喚いている。傍らに近づくと地主の悪状を並びたてている事が分かった。スローガンが叫ばれる、それに呼応する農民、学生達、こちらもそれに倣って手を張り上げて怒鳴っていた。其の地主には何の恨みも無かったが。

一時間位だったか入れ替わり立ち代り、数名の農民が同じような罪状をあばきたてた後、判決が下される。たいていが銃殺刑だから結果はわかっていた。兵隊か民兵が近くの畑に連れ込み既に掘ってあった穴の前に跪かされ銃殺となる。農民達は皆拍手喝采していた。このような悪徳地主批判大会が郊外の農村で続き、中学生達も大会に動員される日が多くなった。課外学習であったのかもしれないが、大会に参加した日は食事も喉を通らなかった。

朝鮮戦争では米軍の参戦で北朝鮮が後退を繰り返し、中国も義勇軍(中国人民志願軍)を出兵することになり、全国から志願兵が続々鴨緑江を越えて北朝鮮に出征していった。沈陽市の役所、工場、大学からも志願兵が続々と送り出されていった。私達は沈陽駅で旗を振って見送った。

朝鮮戦争の記憶は米軍の爆撃機が沈陽市近辺まで飛来し、細菌を振りかけられている昆虫類が散布されたので、この捕捉に全校生徒が狩り出され口にはマスク、手には空のガラスビンを持って郊外の農地や雑木林で昆虫を探し回った事である。その内毎週月曜日には最低５０匹の昆虫を捕捉して学校に持参することが決まり、日曜には家の周りや、時には遠出して昆虫を探し回ったことである。５０匹未満なら先生から怒られるので、その内農村から通学している同級生に頼み込んでこちらの分を含めて月曜には持参してくれるよう頼み込んだこともあった。

当時は父の待遇も改善され従来の現物支給制から月給制になっており、周りの中国人よりは生活に余裕が有ったので、同級生の弁当も作って持っていきその代償に同級生に手助けしてもらった。その時期は中国人の幹部の子弟でも生活は苦しく、農村の子供は弁当等を持参できる状況では無かった。

前に述べたとおり、医者であった父は当時では中国第一と言われた沈陽市の中国医科大学教授として大学で講義を受け持ち、同大学の附属病院産婦人科主任も兼任していた。当時の給与で５０―６０万元、今のレベルでは二百分の一位になろうが、当時は上の下クラスの生活ができたが、毎日の食事は主食が麺類、饅頭(中国蒸しパン)で、副食品不足で豆腐と白菜の妙めものが毎日続いた。

愛すること

田中　昭夫

私の母は農家の末っ子で、あまりしつけらしいことをされずに育ったようだ。生活力に乏しく、私達子どもにも、生活の知恵らしきものをあまり与えてくれなかった。

そんな母のことをいつも、あほうだと言ってしかり、軽蔑していたのが父の母、つまり私の祖母だった。小学校の高学年ころになると、私は様々なことを教えてくれるその祖母が好きになり、母のことを祖母と同じようにバカにし始めた。

友だちの家に行くと、家の中はきれいに片付いていて、その母親は遊びに来た私におやつなどを出してくれた。しかし、私の母はそんなことをしたことがなかった。私は母に、もっと家を片づけてくれとか、もっと良い食事を作ってくれとか、子どものくせに偉そうなことをきついロ調で言い、ののしっていた。母がもっと賢い人だったら、僕はもっとしっかりした人になれたのではないか、などと考えては母を憎く思っていた。

そんな母のことを、まあ、こういう人なんだ、と少しずつ受け入れられるようになったのが大人になってからだ。就職して、収入が入るようになると両親を観光地などに連れて行ったり、映画をいっしょに見にいったりした。母が「昭夫のおかげでいろんな所に行ける。」と喜んでいた。酒を飲みながら母を相手に一晩自慢話をしていたことがある。母は何のことかわからないまま、「へえ～。」と感心した声を出していた。

しかし、あれだけ嫌だった母をどうしてこんな風に受け入れられるようになったのだろう。

叔母が、私の幼い頃のことを時々話題にした。小さいころ私はとても恥ずかしがり屋で叔母の家に行っても母の背に隠れて絶対に出てこなかったというのだ。おぼろげながらそんな記憶がある。知識がついてくると、他人と比較して母のことを悪く言うようになったが、幼い頃、母は私が最も安心できる場所だったのだ。高校を卒業すると、大阪で住み込みの新聞配達をしたが、本当につらかったときには日曜日毎に母の所に帰ってきてホッとしていた。母は何の遠慮もなく帰れる処だったのだ。

とりたてて何かの知恵や技術を持った人ではなかったが、素朴な人であった。あれだけ悪く言っていた祖母も、自分のことを最後まで世話をしてくれた母に感謝していたと聞く。

父が死に、母を引き取って間もなく、母は認知症になって、何度か徘徊もした。仕事の都合で何度か母を施設に預けたりしたが、その母を迎えに行った時、何に対してもあまり反応を示さなくなっていた母が、私の顔を見つけると、いつもとても嬉しそうに笑った。その笑顔を見て施設の人が「息子さんにはかなわないなあ。」と言った。私はそれが自慢でもあった。最後まで母のことを見ることができてよかったと今、思う。

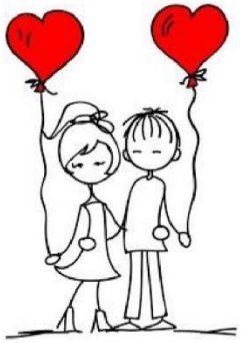
「愛する」なんて唐突に言うと変に聞こえるが、私も母を愛していたと言って差し支えないだろう。大それた感情ではない。自分のことを心配してくれる人を、私も安心させてやり、喜ばせてやりたいと思ったというだけである。愛するとはそんな身近な感情のことだろうと思う。

なぜ私はこんなことを書こうと思ったのか。それは今、世間を見ていると、意外とこんな当たり前の感情を持つことが、難しい人間関係が多そうに見えるからだ。私にしても、たまたま母と良い思い出をつくることができたが、結構自分勝手な私が、いつもこういう人間関係がつくれるかどうかはやっぱり分からない。でも、愛することができた人間関係は良い思い出だ。それは思い出すだけで幸せである。これからの幸せのために、できるだけ周りの人を愛せる人間でいたい。

編集後記

一年一年の積み重ねは、集いの開催が２９回、記録集は２４集を数えることになりました。この積み重ねの思いが地域の皆さまへ、そこから広く社会へとつながることを念じております。その先に平和な社会が創造されていくことを祈りながら、続けております。

第２４集は社会情勢に合わせ、形式を変更いたしましたが、ここに込める思いは変わりません。これまで通りお手元に置いていただき、折に触れ平和を愛する心を育む機会としてご覧いただければ、幸いに存じます。



第２９回　戦争体験を語り継ぐ集い

平成２９年７月２２日開催　戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

＊この冊子は古紙パルプを含む再生紙を使用しています＊